

平成27年度岡山ESD推進協議会
岡山ESDプロジェクト活動支援助成金事業報告書

事業名 コミュニティカフェ啓発事業「ここでずっと暮らし続けたい」

団体名 特定非営利活動法人 まちづかい塾

担当者名 代表理事 藤本真理子

※活動の様子がわかる写真（データもお願いします）と説明を必ず添付してください。

1. 活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）



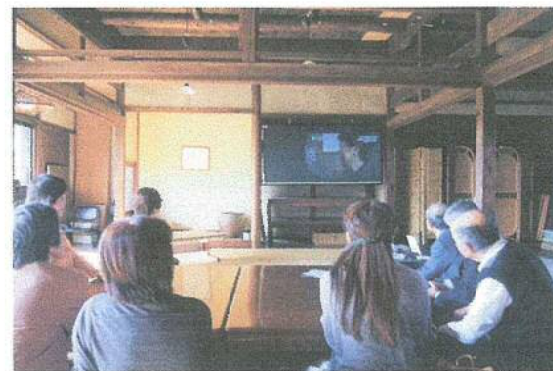
10/18 河田氏のセミナー風景



講師 河田瑠子氏



多様な参加者（行政関係者、福祉関係者、事業主、一般住民 など）



10/18に参加できなかったため、後日、河田氏の事例を学びたいと集まれた愛育委員、民生委員のみなさんの勉強会風景

2. ESD の視点を取り入れたところ、ESD の視点で見直したところ

■行政関係者、福祉関係者、事業主、一般住民が一堂に会し、横につながる支え合いのコミュニティカフェ「地域の茶の間」の事例を学び、人環境の再生をもとに、持続可能な社会を目指す ESD の視点を取り入れた。

■福祉とは社会の「しあわせ」や「ゆたかさ」を意味する言葉であり、地域福祉を ESD の視点から見直した。

3. 取組の成果（参加者の変化、感想など）

■岡山市市社協、高齢者福祉課の方の参加もあり、市の今後の課題対策の参考に活用された。後日、岡山市から現地新潟市へ視察に行き、新潟市市社協との懇談も開催されたとの報告があった。関係行政課の関心を得られたことは、今後の岡山市における横につながる支え合いのコミュニティカフェ「岡山版地域の茶の間」の展開に期待できる。

■一般参加者の関心も深まり、後日、「参加者の話をきき、ぜひ河田氏のセミナーの内容をしりたい」と、民生委員、愛育委員のグループ 2 組の訪問が別々にあり、当日河田氏が置いて行った DVD をみせ、ミニセミナーを開催した。

■その後も個人的な問い合わせや、山陽新聞から詳しく知りたいとの取材もあり、今、求められている仕組みであることを実感した。ともに 10 年にわたる実践から得たノウハウを、求める人に伝え、横につながる支え合いのコミュニティカフェの啓発促進に拍車がかかると期待している。

■セミナーの後、岡山市役所から 3 名が現地へ視察に行き、現「実家の茶の間」見学後、新潟市担当者と、行政としての取り組み姿勢をうかがう会談を行ったとの報告がありました。

4. 今後の課題と展望

■課題・・・持続可能な社会づくりにおいて、互いに必要なときに支え合い、できるところは自分たちで、という緩やかな丁度良い距離感を持てる仕組みを、誰もが参加しやすい「場づくり」として、住民主体で立ち上がる兆しが見えてきた今、行政縦割りの枠組みを超えたバックアップが必要である。

■展望・・・これをきっかけとして岡山市が、高齢者福祉、子育て支援、障害者福祉、ESD 推進課が連携し、地域協働として支え合いの「地域の茶の間」「コミュニティカフェ」をバックアップできる、持続可能な社会基盤の仕組みづくりに期待したい。

「持続可能な社会づくりの担い手（人材）」を育成するために
本事業で、学んだこと、伝えた事

ずっとここで暮らし続けたい

こちよい距離感でつながる 明るい老後を

「持続可能な社会づくりの担い手」を育成するための環境、地域の基盤を
そこへ暮らす人たちが「自ら育む」しくみを、新潟の事例で学びました。

できることを、できる人がやり、「おたがいさま♪～」と支え合う居場所
「生涯現役」そこへ行けば「自分が役に立つ」居場所
地域の茶の間は、皆さんの意識さえあれば、どこにでも作れます。

「居場所」とは

人が人として尊厳を保ち、住み慣れた場所で
自分らしく、生きがいをもって、最後まで暮らせるよう
「おたがいさま」と、支えあい、地域の人と人を結び、
それぞれが「できること」を、活かせる場所のことです。

赤ちゃんは、誰かに世話をされなくては、生きていけません。
しかし、高齢になれば、知識も経験も十分あり、自分で判断し、
誰かに世話をされなくても、日常生活を送ることができます。
一方的にお世話されるだけでは、それまでの蓄積を無駄に感じ、
生きがいを無くし「一人では生きられない人」を、つくります。

高齢者は、長い人生で多くを学び、「できること」をたくさん蓄積しています。
これは、地域の資産です。

体力や機能の衰えがあります。しかし長い人生で蓄積された「できること」を
活かされないことは、それまでの貴重な体験の人生を、反故にしてしまいます。

「役にたつ」これが「生きがい」

「人のお世話にならない」これが「長く生きてきた人としての尊厳」

若いも若きも、生きがいを持って生きる人たちが育む社会が

持続可能な社会だと 私たちは考えています。

みなさんも、生きてきた自分の経験が社会(誰か)に活かされると、うれしくないですか

呼称の遍歴・・・地域の茶の間 → うちの実家 → 実家の茶の間

河田珪子さんの始めた仕組みは、「地域の茶の間」という名前の「居場所」です。

「地域の茶の間」には、誰かに世話になるために来る人は居ません。

誰かの役に立つために、遠くても、集まってくるのです。

高齢者の引きこもり予防や、仲間づくり、地域の絆づくりには、社協の「地域サロン」があると考えられています。しかし「地域サロン」の低迷が「地域の茶の間」の二ーズを、生みました。

「地域サロン」と「地域の茶の間」の違いは

「地域サロン」は

- ① 介護保険対象者のみの集まり、同じ顔ぶれ
- ② 遊んでもらう、教えてもらう、の受け身
- ③ メニューがあり、マンネリ化して退屈

「地域の茶の間」は

- ① 多世代が集まる。年齢制限がない
- ② 役割がある。自分が誰かの役に立つ
- ③ 日常の延長なので 日々、様々。

地域の茶の間を成功させる ルール作り

「うちの実家」へお邪魔した時、目に入ったのは、いたるところへ貼られた「約束事」。でもこれが 大切なポイントのひとつ。誰もが目にし、約束事を共通の認識にすること。そして、誰かが約束事をうっかり忘れていたら、声に出して注意するのではなく、約束事の張り紙を指さすことで、注意を促す。

まわりの人に気付かれない、場の空気を乱さない心遣いが、張り紙の役割でした。

■地域の茶の間のルール 抜粋

- ① どなたが来られても「あの人だれ！」という目をしない。来にくくなる。
- ② プライバシーを訊き出さない。言いたくなければ、話したい人へ、自ら話します。
- ③ その場に居ない人の話をしない。たとえ 褒めることも。
- ④ 玄関を入ったら、すべての人が「利用者」。スタッフは区別できない服装で。
- ⑤ 上下関係ができる、場や席にしない。派閥や上下関係は、和を乱します。
- ⑥ お茶は紙コップを使い、そこに名前を書いてもらう。名前を聞き出さない。
- ⑦ 食事後の食器は最後の一人が箸を置くまで片付けない。遅い人が遠慮するので。
- ⑧ 初めての人には部屋全体が見渡せる場所に案内する。早くなじめるように。
- ⑨ 何かのおりに、隣の方に声掛けする。親しみやすい、きっかけづくり。
- ⑩ 情報を共有する。必要な箇所へ目立つように。

☆誰もが一人で来てても、安心して自分らしくいられる場所。それが 地域の茶の間です。

「持続可能な社会は、人環境の再生・保全から」ということで「昭和の地域力再生」をコンセプトに、まちづかい塾は活動しています。

テーマは「まちづくり」から「まちづかい」への移行。

そして今 「まちづかい」から「ひとづかい」へ

課題・・・多世代同居から核家族への変化が、自立から孤立へという結末を生んでいます。

これは、地域資産である人材、知識、スキルを無駄にし、地域活力低下、さらに社会の負荷を増幅することになります。

私達が、活動の中で出合った方々には、こんな方々がいました。

① 子供は独立し、妻(夫)が先立ち、一人暮らし

元気なころは、

- ・朝早くから夜遅くまで職場。近所の人とあいさつすることもなく。
- ・土日は接待や残業で、近所の地域活動に参加することもなかった。
- ・働くことばかりで、趣味と言えるものがなく、仕事以外の人間関係がない。

↓

一人になった今、今さら地域へは参加しにくい、参加できない。

近隣に同世代の人がいなくて、何日も、人と会話することがない。

② 子供と同居しているが、生活時間帯が違うので、団欒もなく、食事も一人で食べる。

③ 子供が同居を誘ってくれるが、遠い場所なので、住み慣れた地域を離れたくない。

④ 施設への入居も考えているが、低所得で入れるところは、空きがない。

(最近複数ベッドの大部屋がないため、個室では寂しいので、入りたくない)

(低所得で、一部負担金をはらえないから、ディサービスも訪問介護も利用できない)

(介護保険適応範囲は狭く、時間=負担金のため、必要な手伝いや、話し相手は頼めない)

⑤ 施設へ入ると、思い出のある家具も品もすべて処理しなければならないのが悲しく、

施設へは入りたくないから、寂しくても一人暮らしを続けている。

などなど・・・

政府の様々な課題から高齢者、障害者の在宅が進められる中、これら地域資源を活用しない手はありません。生涯現役で、地域づくりに参加していただけることが、持続可能な社会の基盤だと私たちは考えています。体力・機能の衰えや障壁を、みんなでサポートすれば、社会の「負荷」と位置付けられがちな人材が、大きな活力になります。

新しいことを始める基盤は、いままで培われた経験と知識の積み上げであることを念頭に、知恵袋を地域へ活かすステークホルダーの活躍の場をつくりましょう。

まず、経験豊富な地域資源を施設へしまいこまず、生かす場と仕組みを、つくりませんか。

NPO 法人まちづかい塾